第８章　ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティ

イントロダクション

母性的エネルギー、根源的エネルギー（アディ・シャクティ）、デヴィ、オームといった神の側面は、ヒンドゥー教の中ではドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティと呼ばれてきました。一年のうちこの３つの神格を崇拝する数日間をナヴァラトリといい、そこには人の心の内にある悪の資質を破壊し､内的世界､外的世界がともに歓びと平安で満たされるようにとの意味合いがあります。霊性の鍛錬（サーダナ）を続けることで、人は（この３つの女神に象徴される）内なる源泉に働きかけ、自らを神の真理というさらに純粋な領域にひきあげることができます。遍在するこの３つの神格は人の肉体にも宿ります。

万物の創造の発生とそれを維持する力は、物質、生命、精神のどの領域にまつわるものであろうとただひとつしかありません。シャクティ（エネルギー）です。ヴェーダンタ哲学でいう絶対者ブラーフマンと、タントラでいうデヴィ、つまりシャクティはまったく同じのものです。そのエネルギーが静的状態にあり、拡張も収縮もなく、創造をまつ宇宙がまだ「種子」でさえないとき、それをブラーフマンと呼びます。創造を展開しはじめ、維持され、ふたたび源へと帰る間がシャクティです。…（略）…ブラーフマンをこの世になぞらえれば、シャクティはその意味です。ブラーフマンを火にたとえるなら、シャクティは燃焼する力です。この２つを切りはなすことはできません。ひとつでふたつ、ふたつでひとつです。

ヒンドゥー教の神話文学の中では、この力は女性性の神デヴィとして、男性性の神格の伴侶の形で描きだされます。三大神それぞれに伴侶としてのシャクティ、つまりデヴィの存在があります。ブラフマー神の妻サラスワティ、ヴィシュヌ神の妻ラクシュミー、シヴァ神の妻パールヴァティです。

（スワミ・ハルシャーナンダ著　『ヒンドゥー教の神と女神』　７７－７８ｐ）

ドゥルガー

ドゥルガーとは文字通りの意味では近よりがたいもの、理解しがたいものの意味です。神の威力を一手にひきうけ神格化した存在であるため、近よりがたく理解しがたいのも自然なことといえましょう。しかし大宇宙の母なる神であり、崇拝するものには慈悲の神となります。

ドゥルガーのいくつかの側面のうちでも、ヨガネトラ（瞑想の眠り）とは眠りの力を示し、ヴィシュヌ神が創造から次の創造までの間、その力を頼りに休息します。宇宙の創造、維持、消滅をになう女神としてたたえられます。神秘的な力をそなえ、まさに知性、英知、記憶の体現です。満ちたり美しい女神であると同時に恐ろしい女神でもあります。

ドゥルガーはこの世の現象的側面です。根本原理であるヴィシュヌ神の神秘の力であり、また幻惑する力（マーヤー）でもあります。この女神を満足させたときのみ、人は魂を解放することができます。人々のハートにある知性を乗りものにし、時間をのみこみます。まさにあらゆる幸運、善なるものの体現です。つねに子どもたちを守護しています。首に人の骸骨でできた首飾りをかけた恐ろしい女神カーリーが、ドゥルガーのまた別の側面です。…（略）…ドゥルガーには３つの主な化身があります。マハーカーリー、マハーラクシュミー、マハーサラスワティ―――３つのグナ（タマス・ラジャス・サトワ）からなるマハーイシュワリ、唯一なる至高の力の３種の顕現です。

マハーカーリーはドゥルガーのタマスの資質の側面が神格化したものであり、マーヤーの化身です。このマハーカーリーが自らすすんで後退しないかぎり、私たちの内なる神が目をさまし、私たちをおとしめようとする邪悪な力を滅ぼすことはできません。

（スワミ・ハルシャーナンダ著　『ヒンドゥー教の神と女神』　１０４－１１０ｐ）

◇　◇　◇　◇

不完全で限界のある哀れな人間には、千もの内なる敵がいます。否定的な想い、恐れ、焦燥感に満ちています。利己心、嫉妬、いやしさ、偏見、憎しみ―――これらはほんの数例にすぎません。サダカ（霊性の探求者）はこれらの無法者たちをたたき出さねばなりません。母神カーリー（ドゥルガー）・クリパ（慈悲）を得て、

これらの破壊者たちを滅ぼさねばなりません。どんないいわけも通用しません。…（略）…強い決意、断固とした意志、内なる崇高な闘い、血のしたたる残忍なカーリーの剣のような血まみれの努力が必要とされ、滅ぼした虚偽の数々でできた骸骨の首飾りを自ら喜んで首にかけようという気がまえなしに、内なる平安、内なる秩序はありえません。

否定的な想い、弱さ、いやしさを滅ぼすには、内なる恐ろしき女神を呼びさまさねばなりません。それこそ私たちの真の姿、神の存在である至高のパラメシュワラ・スワルーパから私たちをひきはなしてきたものです。

内なる弱さ、ただそれを追いはらうだけですべてをなしとげたとはいえません。内が空っぽになれば、また裏口から侵入してくるからです。…（略）…正しい行いを続けようという積極的な努力にも力をそそがなければなりません。

（スワミ・チンマヤーナンダ著　R.S.ナザン編纂　『ヒンドゥー教の象徴性』　１５３ｐ）

ドゥルガーには４、８、１０、もしくは２０本の腕があります。左の腕に握られた法螺貝シャンカはプラナヴァ「オーム」を象徴し、ドゥルガーも私たちひとりひとりも、神のエネルギー、神の知性の化身であることを示しています。ドゥルガーはその法螺貝を鳴らし、人々により気高く価値ある一生を送るよう呼びかけます。はまりこんでいる俗世に背をむけ、究極的には神のもとにたどりつき、何ものにも破られぬ平安と成就を手にしなければなりません。

左手の三叉檄（トリシュラ）は３つのグナ（資質）、タマス・ラジャス・サトワの象徴です。努力と恩寵によってこれらの資質を滅ぼし、純粋なる神性があらわにされるまでは、この３つの資質が（人を含む）すべての事象をコントロールします。またこの三叉檄は神の存在、神の威力が３つの「時」―――過去・現在・未来―――におよぶことの象徴でもあります。別の手の骸骨は、神の威力が万物を最終的に消失させる「時」を超えると同時に、偽り、邪悪さをもしのぎ滅ぼすことができることを示しています。

鐘は神聖なるプラヴァナ「オーム」の象徴です。セルフの存在に気づき認識するよう、つねに響きわたりあらゆる角度から人々の知性に呼びかけます。

ドゥルガーは右手に持った棍棒を打ち、人を落胆させ、不満に陥らせ、落ち着かない気分にさせます。人は神の呼び声に耳を貸さず、また聞こえていても従おうとせず、五感を満足させようとかけまわります。帰依者に完全なる至福という至上の体験を授けるため、愛情深さから棍棒をふるいます。

（スワミ・チンマヤーナンダ著　R.S.ナザン編纂　『ヒンドゥー教の象徴性』　１１６－１１７ｐ）

◇　◇　◇　◇

ドゥルガーを破壊のマヒサスラ＝雄牛、強者が制するという森の掟（おきて）とみなすことができます。雄牛は自分の目的のためにははむかうものを許さぬ残忍さ、凶暴さの象徴です。…（略）…また人の内の無知とかたくななエゴを表します。それらを屈服させ克服するには、全精力を用いて不屈の精神で闘わねばなりません。しかし神は自ら助くるものを助けます。つねに恩寵と神の助力が差しのべられることでしょう。これがナヴァラトリの祭りのヴィジャダシャミ、５つの知覚器官と５つの行動器官の勝利として知られます。

ドゥルガーの乗りものライオンは、もっともすぐれた動物であり、とりわけ勇敢さを象徴します。けもののような資質やエゴを屈服させるのに、霊性の探求者には勇猛果敢さが要求されます。神性をあらわにするには、動物的な衝動やエゴその他を完全にコントロールしなければなりません。ドゥルガーがライオンに乗るのは、低次の資質を完璧にコントロールしていることの象徴です。

（スワミ・ハルシャーナンダ著　『ヒンドゥー教の神と女神』　１１０－１１２ｐ）

◇　◇　◇　◇

低次の資質をコントロールできたとき、女神ラクシュミーは必ずやあらゆる祝福を授けます。いったん神の資質でないものがうち負かされ排除されると、「欲しい」という想いが変化していき抜けおちます。これこそ最高の祝福です。

（R.S.ナザン編纂　『ヒンドゥー教の象徴性』　２７６ｐ）

ラクシュミー

維持神ヴィシュヌのエネルギーであり伴侶であるラクシュミーは、多様性の源、幸運の女神として描かれ、どちらの側面も維持のプロセスに不可欠です。…（略）…ラクシュミーは富、幸運、力、美の女神です。

ラクシュミーはふつう蓮の花に座り、蓮の花を両手に持ち、蓮の花で飾られ、たいへん美しく魅力的な姿で描かれます。

４本の腕は４つのプルシャルタ（人生の最終目標）―――ダルマ（正義）、アルタ（富）、カーマ（欲望）、モクシャ（解脱）―――を授ける力のあることを示します。

それぞれ開き加減の違う蓮の花は、世界や万物が様々な発達段階であることを示しています。

（スワミ・ハルシャーナンダ著　『ヒンドゥー教の神と女神』　８２－８５ｐ）

◇　◇　◇　◇

富とはお金のことだけを示すのではありません。気高く価値ある人生、心や知性の力、倫理や道徳なども含まれ、それらが霊性の富を形作ります。ナヴァラトリではドゥルガー崇拝の３日間の後、サラスワティ崇拝の３日間を次にひかえ、そのあいだの３日間ラクシュミーを崇拝します。…（略）…ラクシュミーは人々に富を注ぎこみます。…（略）…富とはただ自然にやってくるものではありません。人本来の能力として富を得る力がそなわっており、個々の努力を通じてひきださねばなりません（プルシャルタ）。

バガヴァータ・プラーナに、不死の甘露を手に入れるため、神々と悪魔たちが乳海を攪拌した話があります。攪拌によって出現した貴重品々のひとつが女神ラクシュミーです。ラクシュミーは、純粋でサトワの資質の心が、内省と高次のセルフを瞑想することで攪拌されたとき、人の内で起こる倫理的、文化的価値観の創造と発展を象徴します。

ラクシュミーの手に握られた蓮の花は、セルフを認識することが人の到達すべき至上のゴールであることの象徴です。

（A. パルタサラティ　R.S.ナザン編纂　『ヒンドゥー教の象徴性』　１９５－１９６ｐ）

サラスワティ

サラスワティとは創造神ブラフマーのシャクティ＝エネルギーであり伴侶です。つまり万物を生み出す万物の母といえます。

サラスワティはあらゆる知性、芸術、科学、技術が神格化されたものです。知性が無知の暗闇とは対照であることから、すけるような白さで描かれ、あらゆる芸術、科学、技術の化身としてきわめて美しく慈悲深い姿をしています。…（略）…たいていブラフマーの乗りもの白鳥と一緒にいます。…（略）…白鳥には、ミルクと水の混じったものから水を残しミルクだけをより分けて飲む独自の能力があり、これはヴィヴェーカ（英知、識別）の能力、つまり知性、善を吸収し、悪を拒否する力の象徴とされます。

創造神ブラフマーの伴侶として、ブラフマー神の威力と知性を表し、それなしに創造を行うことは不可能です。…（略）…

４本の腕は何ものにも妨げられることがなく、いたるところに力を発揮すること、普遍性を示します。学問の女神でもあるため、この世のあらゆる分野にわたる科学をおさめた書物（パシュタカ）を左手にたずさえています。より高い意識や感情、情熱が調和した心なしにたんなる知力で学んだところで、それは木くずのように無味乾燥なものです。芸術を養うことの必要性を訴え、抱えたヴィーナ（弦楽器）を奏でます。右手にはアクスマラ（数珠）を握ります。霊性の科学―――タパス（苦行）、瞑想、ジャパ（神の御名の念唱）などを含むヨガすべての象徴です。

（スワミ・ハルシャーナンダ著　『ヒンドゥー教の神と女神』　７８－８１ｐ）

◇　◇　◇　◇

サラスワティとは「自らのセルフ（スワ）の本質（サラ）を授ける者」という意味です。蓮の花に座ることで、死とは自らの体験にもとづく真理に立脚するものであることを象徴しています。握られた経典は、それを学ぶ

ことにより真理に到達しうることを示します。４本の腕は人の内なる資質の４つの側面、マナス（心）、ブッディ（知性）、チッタ（意識）、アハムカーラ（エゴ）を象徴します。

（R.S.ナザン編纂　『ヒンドゥー教の象徴性』　１９１ｐ）

サラスワティは学ぶ者を啓蒙し、無限の知性を授ける真の導き手であるだけでなく、サマディーという悟りの段階を表してもいます。この神性を示す段階は、ちっぽけなエゴから完全に解放され、至高のセルフを見いだした状態といえましょう。

ダセラ祭（ナヴァラトリ）は、インド国内はもとよりヒンドゥー教の国々で１０日間にわたって祝われます。最初の３日間、カーリー・ドゥルガーが呼びさまされ、人々の内なる否定的資質の反映、悪魔が殺されます。次の３日間で女神ラクシュミーが崇拝され、人の内なる神性の資質や、愛、優しさ、忍耐、献身、努力、非暴力といった富が養われます。サラスワティが次の３日間崇拝され、人の霊的発達の最終段階として、経典を学び内省と瞑想を続けることで神性があらわにされるようにと祈ります。人生におけるこれら３つの段階を乗りこえると、つまり祭りの最終日のヴィジャヤ・ダサミの日、エゴの象徴である悪魔が焼かれます。

ヒンドゥー教の母なる神々（デヴィ、シャクティ）の示す真理に関する象徴性や神話は膨大なものであり、イントロダクションでこの３つの女神、ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティの側面が手短に論じられましたが、これらは母なる神の顕す偉大な威力のうちのほんの一部を示すにすぎません。

次に続くバガヴァン・シュリー・サティア・サイ・ババの言葉から、創造における母なる神についてより多くのことが明らかにされます。

１．ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティ（概要）

日常や自然の中で、母性原理にある神の本質を示すものにたくさん出会います。牛は私たちに滋養を与えるため血液をミルクに変えます。このことから牛はマトゥル・ムールティ（母なる神の具現）と考えられます。地は地面を提供し、つねに私たちを保護しています。地もまたマトゥル・ムールティです。そしてアンギラ、食物を消化する様々な液体が私たちの肉体でつくられます。このラサ・スワルーパは私たちの四肢に宿り、肉体を動かし、生命を維持していることから、これもやはりマトゥル・ムールティと考えられます。マハリシたちは数々の経典を記し、私たちが生きるうえで何が望ましく何が望ましくないのか、スレヨ・マルガとプレヨ・マルガを示してきました。リシたちもマトゥル・ムールティです。スジュナーナム、ヴィジュナーナム、プラジュナーナム（３種の知識）を授ける訓戒者、師もまたマトゥル・ムールティです。牛、地、リシ、訓戒者、これら５つはまさに母なる神の化身です。

母性原理とはサルヴァ・シャクティ・スワルーピニであり、神の母性の側面を世に示すためナヴァラトリが祝われます。９日間にわたりドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティを崇拝します。この３つの母なる側面は何が土台になっているのでしょうか。

ドゥルガーはシャクティス・ワルーピニです―――肉体、精神、魂の力を授けます。ラクシュミーはあらゆるアイシュワリヤ（富）を授けます。ジュナーナ・アイシュワリヤ（霊性の知識）、プラーナ・アイシュワリヤ（生命エネルギー）、ヴィディヤ・アイシュワリヤ（世俗的知識）です、サラスワティは知性の力、識別の力、言葉の力を授けます。

母性原理はまさにドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティの具現です。あらゆるエネルギー、あらゆる能力を授けます。すべての富を与え、私たちの成長、繁栄を助けます。また教育を通じ、私たちが名声、評判を手にするよう望んでいます。これら３つの神性原理は、私たちの母親のもとに訪れ溶けこんでいるのです。

（サンキルターナム　２－３ｐ）

◇　◇　◇　◇

まず第一に、自然とは何かを理解しなければなりません。自然それ自体がジャガディーシャ（万象の神）です。万物を支配するのは唯一なる実在サット・チット・アーナンダ・スワルーパ（存在・意識・至福の具現、アートマ）です。大宇宙の万物には、アスティ（存在）、バーティ（輝き）、プリヤム（歓び、愛らしさ）の

原理が共通します。名前と姿の違いが多様性を生じさせているだけです。一過性のものにすぎない名や姿を不必要に信じこんでいるがゆえ、ものごとの永遠性、神性への信仰をなくしています。これは大きな間違いです。この誤った道を放棄し正しい道を選んだ日、神が誰なのかを理解するはじめの一歩を踏みだすことができます。

プレマスワルーパ（愛の体現者）たちよ！　自然それ自体が神であることを堅く信じなさい。神がどこか目に見えないところに存在すると思うのは間違いです。人ひとりひとりが様々な姿で顕れた神であることを確信しなさい。９日間のナヴァラトリは自然の様々な側面を理解するために祝われます。

（サンキルターナム　１３ｐ）

◇　◇　◇　◇

プレマスワルーパたちよ！　神は私たちの内にいます。すべての力、すべての能力が私たちの内にあります。この真理を認識し、自らを正しく導きなさい。天国や何かはどこか別のところにあるのではありません。

（サンキルターナム　７ｐ）

◇　◇　◇　◇

ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティは私たちの内にいます。目には見えないだけです。それらがなければ、肉体が存在することも、見たり、話したり、歩いたり、活動を営むこともできません。私たちを誕生させ、様々なヴィディヤ（知識）を与える母親のように、この３つの神の原理の宿る私たちの肉体は母親です。これらの原理は目に見えず、切りはなせず、潜在するものです。これら内在する力のすべてを顕現したとき、私たちは自らを「人間」と呼ぶことができます。この能力を示すまでは、真に人であるということはできません。

（サンキルターナム　１４ｐ）

◇　◇　◇　◇

ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティの意義は正しく理解されねばなりません。この３神は人に潜在する３つの力の象徴です。イッチャ・シャクティ＝意志の力、クリヤ・シャクティ＝行いの力、ジュナーナ・シャクティ＝認識の力です。サラスワティが話す力（ヴァク）、ドゥルガーが活力（活動の力）、ラクシュミーが意志の力として人に内在します。肉体はクリヤ・シャクティを示し、心はイッチャ・シャクティの貯蔵庫であり、アートマがジュナーナ・シャクティです。クリヤ・シャクティは物質である肉体から生じます。不動性の物質である肉体に動きを与え活性化するのはイッチャ・シャクティです。イッチャ・シャクティに活動力を与えるのはジュナーナ・シャクティであり（エネルギーを）放射します。この３つの潜在能力はマントラ「オーム・ブール・ブワ・スワハ」に表されています。ブールはブー・ロカ（地）、ブワはエネルギー（人の良心の意味もあります）、スワハは放射の力の意味です。この３つはどれも人に内在します。つまりドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティが人のハートに宿っているのです。

人は怒りや憎しみのようなラジャスの資質を表に出してしまいがちです。これはドゥルガーの威嚇的な面の顕れです。歌や詩で神をたたえることや、そこからかもしだされる歓びあふれる波動はラクシュミーの力を示します。心にわきあがる慈しみ、愛、寛容さ、思いやりなどのすんだ波動はラクシュミーからきています。

絵や偶像で形として顕されたドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティを崇拝すると、人に潜在するかすかな力に物理的に働きかけることになります。不幸なことに苦境のさなかにいる今日の人々は、自らに内在する力に気づくこともなければ、女神への敬意を養うこともありません。

病の処方箋は内にあるというのに、人は外側のどこかに求めようとします。…（略）…

同様に人は内なる神性を認めようとせず、外側の物質の数々に求めがちです。自らの内に宿る神性への確固とした信仰を養いなさい。必要なのは、内なる神を体験するため視点を内にむける、それだけです。

人は表面的な霊性修行（サーダナ）にばかり身をおいています。内面にむかうものでなければなりません。どんなに学識があろうと、ハートで理解していかなければ何の役にも立ちません。学者は経典の数々を解説しても、内面的な裏づけに欠けています。ヴェーダに精通した人は書かれていることを説明できるかもしれませんが、ヴェーダプルシャ、ヴェーダがたたえる至高の実在を認識できてはいません。

寺院に行く人は偶像の前で目を閉じます。求めるものは神の内的ヴィジョンであって、偶像の外側の姿を見

ることではないからです。ギータで高らかに宣言されているように、神は遍在です。名や姿は様々に違っても、神はひとつです。

人は現象界で暮らし活動を営みますが、あらゆる活動を神を喜ばせる捧げものとして営むべきです。

この１０日間のナヴァラトリのお祭りで何をしたらよいのでしょう。イッチャ・シャクティ（意志の力）を神を求める熱意にしなさい。クリヤ・シャクティ（行いの力）を神聖な行いをする力に変えなさい。ジュナーナ・シャクティ（識別の力）を神そのものに変えなさい。

（サナタナ・サラティ　１９９４年　１１月号　２８３－２８５ｐ）

◇　◇　◇　◇

人にはイッチャ・シャクティ（意志の力）が授けられています。その真の目的は、美しいこと、崇高なこと、向上することを意志するためです。もう２つ人に授けられたシャクティとは、ジュナーナ・シャクティ（知る力）とクリヤ・シャクティ（行いの力）です。この３つの相関性を示す例をあげましょう。「とてもコーヒーを飲みたくなり、それを実現しようと思った。しかしイッチャ（意志）だけではコーヒーは作れない。そこでジュナーナ（英知）を活用し、コンロ、水、砂糖、ミルク、コーヒーの粉を用意した。それでもイッチャはまだ実現されない。そこでクリヤ（行い）を活用し、飲みたいと思ったコーヒーを、知っている作り方にそって作った」

さて、イッチャ・シャクティが神にたどりつこうとしているとします。ただ思うだけでは不十分です。目的にたどりつくことはできません。そこでジュナーナ・シャクティが、勝利に続く道はあるのだからあきらめてはいけないとあなたに助言し、目の前に様々なサーダナを示します。クリヤ・シャクティがそれらを取りあげ、あなたが目的のものを手にするまでそれを行い実践しつづけるようふるいたたせます。不運なことに、１０人のうち９９人までがイッチャ・シャクティ止まりです。意志するだけにとどまります。待ちかまえる至福を、求め、得ようとしません。信仰心はぐらつき、力強く歩き出すことがありません。イッチャが一級の試験に合格しようとしているのに、ジュナーナは無視され、クリヤは何もなされぬままです。テストでクリヤの熱意の成績がたとえ１０００番だったとしても、一級は実に簡単に授けられるのです。

（サティア・サイ・スピークス４　１８４ｐ）

◇　◇　◇　◇

欲望（サンカルパ）の上に建てられた建物は長くはもちません。欲望の住まいを神の意思（イッチャ・バーヴァナム）の住みかに変えなさい。意志の力（イッチャ・シャクティ＝ラクシュミー）が行いの力（クリヤ・シャクティ＝ドゥルガー）に変えられると、ジュナーナ・シャクティ（英知の力＝サラスワティ）が生じます。魂の解放カイヴァリヤムは、この神の英知を通じて授けられます。

ナヴァラトリのお祭りは、ヴィシュヌ、シヴァ、ブラフマーの伴侶を崇拝するために祝われるのではありません。３つの女神は神の威力の象徴です。この力はすべてヴィシュヌ神がもたらします。全宇宙は無数の姿をかりたヴィシュヌ神の顕れなのです。様々な姿形の背後にあるこの一体性を認識しなければなりません。命あるものすべてが、その命の吐息として同じ空気を吸っています。五元素も万物に共通です。五元素は自然をつくる材料です。しかしパラタットワ（至高の原理、神）に五元素はありません。五元素はいずれも滅びるものであり、神は永遠不滅です。死すべきものから不死の永遠性にむかう最善の方法とは、神の愛（プレマ）を養うことです。

ハートは空のようなものであり、想いという雲が太陽であるブッディ（知性）と月である心を隠しています。ヴァイラーギヤ（無執着）が、ハートにわきおこる想いや欲望を取りのぞく道具です。ナヴァラトリのデヴィ・プージャ（女神崇拝）は、世俗的な執着を捨てて心を神にむけるために行われます。

（サナタナ・サラティ　１９９２年　１２月号　３０５ｐ）

◇　◇　◇　◇

ナヴァラトリの間、毎日神々のうちのひとつの神格が崇拝されますが、外側だけでなくハートと魂で崇拝しなさい。肉体でどう礼拝するかはその場かぎりのものです。肉体の価値はうちに宿る魂の価値で決まります。肉体を神聖なる寺院とみなしなさい。

（サナタナ・サラティ　１９９４年　１１月号　２９０ｐ）

◇　◇　◇　◇

ナヴァラトリはデヴィ・マハートミヤム、デヴィ・バガヴァータムに描かれるように、パラシャクティ（女神のエネルギー、大宇宙と小宇宙に内在する）が邪悪な勢力＝アスラに勝利した栄光をたたえて祝われます。パラ・シャクティはあらゆる人の内にクンダリーニ・シャクティ（眠っている魂のエネルギー）として宿り、それを目覚めさせることにより、心の内の悪の資質を滅ぼすことができます。ですからナヴァラトリとは表面世界、内面世界がともに平安と歓びで満たされるよう、外側にも内側にも宿る神を慕うすべての人々のためのお祝いです。体系だったサーダナを行うことにより、神が人に授けた内なる源泉を躍動させ、より純粋でより幸福な実在の領域へと自らをひきあげることができるのです。

（サティア・サイ・スピークス７　１５９ｐ）

◇　◇　◇　◇

バラティヤの人々はデヴィ（母なる神）を崇拝するひとつの形として、太古の昔からナヴァラトリのお祭りを祝ってきました。９日間にわたりドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティを崇拝します。この３つの女神とは誰でしょう。この３つの御姿は人々を惹きつけつづけてきました。その意義は３つの力（シャクティ）で表されます。カルマ、ウパサナ、ジュナーナです。

（サナタナ・サラティ　１９９４年　１１月号　２８２ｐ）

◇　◇　◇　◇

ヴェーダは心がさまようとき、必ず３つの世界を感知しているといいます。３つの世界とは何でしょう。ギータにもガヤトリー・マントラにも示された親しみある世界、ブール、ブワハ、スワハ＝ブーロカ、ブワーロカ、スワルガです。これら３つはアディブーティカ、アディダイヴィカ、アディアートマとして人にも内在します。私たちの祖先はこれらをドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティという女神として崇拝してきたのです。

形あるものはすべてドゥルガー―――エネルギー（シャクティ）と関連づけられる女神―――に由来します。人には理解の範囲を超えた無限の力があり、それが神性です。しかしそれを認識する努力をまったくしていません。この力がなかったら、どうして人類が月までたどりつけたでしょう。何が地球の自転を可能にしていますか？　何かの機械でもマントラでもありません。地球それ自体の内に力が宿っているからです。人やその他の物質にも宿るこの力は宇宙エネルギーと呼ばれてきました。宇宙エネルギーとは何ですか？　太陽のエネルギーと輝きの源はこの宇宙エネルギーです。人の心の力、はるかかなたの星をみとめる目の力、それらもまったく同じ宇宙エネルギーからきています。

この見る力により、人はあらゆる創造物を目にすることができます。この力に勝るものはありません。つまり人にはすべての力が授けられているということです。しかし無限の力は人それぞれの発達のレベルに応じて認識され駆使されます。電流は温める、灯りをともす、ファンをまわすなど、様々な目的で活用されます。それと同じで人の内にある神性の宇宙エネルギーも、人により様々な目的で活用されます。このエネルギーは誰の中にもあります。神性エネルギー、つまり無限の宇宙エネルギーをあらわにする能力があることから、人は神（ヴャクティ）の化身といわれるのです。人であるとは、隠された目に見えないものをあらわにすることにあります。

人に内在するこのエネルギーは、根源的エネルギー（アディ・シャクティ）であり、OMと呼ばれます。このエネルギーは物質界（プラクリティ）の物質にあまねくいきわたります。これがブールとして知られるものです。この物質を活性化するまた別のエネルギー、波動があります。プラーナ・シャクティと呼ばれる生命エネルギーです。この生命エネルギーが肉体のあらゆる器官を活動させています。これがブワハです。ラクシュミーはこのブワハの象徴です。見たり聞いたり様々な活動を可能にするこのエネルギーを神格化したものです。善いものを見、善いことを聞き、優しい言葉で語り、善い想いを抱き、善い行いをする力の象徴です。善良なるもの、幸福、この世の幸運なできごとは、すべてラクシュミー原理に由来します。

３つめのエネルギーはサラスワティの姿で表されます。サラスワティは言葉の女神（ヴァク・ディヴァータ）

です。ラクシュミーは生命エネルギーの具現（プラーナ・スワルーピニ）、ドゥルガーは物理的力の具現（シャクティ・スワルーピニ）です。これら３つを統合したものがアートマ原理として表現されます。

（サナタナ・サラティ　１９９４年　１１月号　２８７－２８８ｐ）

◇　◇　◇　◇

ラクシュミー、サラスワティ、パールヴァティという三大神の伴侶についてのあれこれは、まったく愚かな議論です。それはあなた方がサムサーラ（俗世）のメガネをかけていることを示すにすぎず、俗世的な幻想を「天界の家族」に投影したもの、人々の渇きを癒すために人の姿をかたどってあみあげた物語にすぎません。女神の名は神に内在するシャクティ（神性エネルギー）を便宜的に表しているだけのものです。たとえばラクシュミーとは、ヴィシュヌ神の恩寵ダーヤ（慈悲）を神格化したものであり、だからこそヴィシュヌの胸の内（フリダヤ）にいるといわれるのです。シヴァ神の半身であるパールヴァティが、シヴァ神にとりこまれ分かつことができないのも、それと同じ意味でのことです。創造、維持、消滅の力は、神の中では共存かつ連続しています。なぜこの３つが共存できるのか疑問に思うことでしょう。電流のことを考えてごらんなさい。電流はまったく同時にまったく同じ力で、産出、維持、消失しつづけます。３つのシャクティ（神性エネルギー）も、絶対実在の３つの側面と切りはなせぬものとして描かれているのです。人の責務とはシヴァーシャクティの合一をはたすことにあります。人とはそこから生じるきらめき、永遠不滅の炎のゆらめきに他ならないからです。

（サティア・サイ・スピークス１　２２３ｐ）

◇　◇　◇　◇

ナヴァラトリのお祭りの間、人の悪の資質を一掃する目的でクムクム（神聖な赤い粉）を用いて神を礼拝します。赤い粉は血液の象徴です。この礼拝の意味とは、神に自らの血液を捧げ、かわりに平安という神の贈りものを受けとるということにあります。

（サナタナ・サラティ　１９９４年　１１月号　２９０ｐ）

◇　◇　◇　◇

９日間にわたって根源的エネルギーの勝利を祝うナヴァラトリには、メッセージがこめられています。そのエネルギーがサトワ（平安）の側面として顕れると、偉大なる師、啓示により導く者、マハー・サラスワティとなり、ラジャス（活発さ、力強さ）として顕れれば偉大なる授け主、守り主、マハー・ラクシュミーとなり、タマス（鈍性、不活性）として顕れたとき、ただしそれが活動力をもたず潜在的であるときには、偉大なる暗黒の破壊者、幻惑者、マハー・カーリーになります。シャクティとは全能にして遍在、無限大にして極少であり、外的物質世界であろうと内的意識の世界であろうと、どこにでも接点をもちうるものです。プラフラーダは疑り深い父に言いました。「何を疑い、論じ、手間どっているのですか、求めればどこにでも見出すことができるというのに」未知の世界、既知の世界、あらゆるものの近くに遠くに、前に後ろに、外に内に存在しています。

（サティア・サイ・スピークス７　１６０ｐ）

◇　◇　◇　◇

ナヴァラトリとは９日間の夜の意味です。夜は暗闇に関連します。暗闇とは何ですか？　無知の暗闇のことです。ナヴァラトリのお祝いは人をとらえつづけている９種類の暗闇を取りはらうことに目的があります。デヴィに関連づけられるとき、そのデヴィとはドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティがひとつになったのもののことです。この３つがひとつになりシャクティを表します。このシャクティが、自然界のあらゆる現象（プラクリティ）の起因となるエネルギーです。自然とはエネルギーであり、そのエネルギーを支配するもの、それが神です。

自然（プラクリティ）は３つの資質、サトワ・ラジャス・タマスからなりたちます。サラスワティがサトワ・グナ、ラクシュミーがラジョ・グナ、パールヴァティ（ドゥルガー）がタモ・グナの象徴です。プラクリティ

（自然）がこの３つの資質（サトワ・ラジャス・タマス）からなりたつことでコントロールされていることから、人々はドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティを崇拝してきました。この３つは女神なのではなく、３つの資質を明確に示すための象徴に他なりません。

神の恩寵を得るためには、まず第一にプラクリティを崇拝しなさい。一方で人として自ら努力する必要があり、もう一方で神の恩寵を得る必要があります。プラクリティ（自然）とパラマートマ（全セルフ）とは電極の陰極、陽極のようなものです。神（陽極）の威力がどんなに強力であっても、プラクリティ（陰極）がなければ創造はありえません。創造の土台はプラクリティです。たとえていえば、どんなに優秀な種を持っていたとしても、それを地面に植えなければ結実は得られません。創造というプロセスにおける自然の役割もこれと同じことです。

人が神を忘れ、自然から得られるものばかりを追求すれば、最終的には自らを破滅に追いやったラーヴァナのようになってしまいます。神の恩寵を得るには、ハート、言葉、行いを浄化しなさい。この３つの浄化はヴェーダンタ哲学ではトリプラスンダリといわれます。あらゆる繁栄の具現であるラクシュミーはハートで象徴されます。口がサラスワティ、純粋な行い（クリヤ・シュッディ）がドゥルガーの象徴です。ナヴァラトリのお祭りを祝うのは、想い、言葉、行いを浄化することにより、人が抱える暗闇を追いはらうためです。

人の肉体は自然から生じます。自然には２つの姿があります。アパラ・プラクリティとパラ・プラクリティです。アパラ・プラクリティには８つの富（アシュタ・アイシュワリヤ）があります。カーマ、クローダ、モハ、ローバ、マダ、マトサリヤ、そして３つの心理機能、マナス、チッタ、アハムカーラの８つです。パラ・プラクリティ（より高次の資質）は人の意識に相当します。生命エネルギー（プラーナ）と意識（チッタニヤム）がなければ人は死体にすぎません。人間性とは低次の資質（アパラ・プラクリティ）の５つの要素をコントロールし、生命エネルギーと意識（チッタニヤム）で表された高次の資質に溶けこむことにあります。

ナヴァラトリは三部構成になっています。最初の３日間でドゥルガー、次の３日間でラクシュミー、最後の３日間でサラスワティを崇拝します。ヒンドゥー教のお祭りにはどれも神聖な目的があります。しかし残念なことに、今日お祭りはそこに秘められた意義が理解されぬまま、表面的な儀式として祝われるのみです。どの御姿を崇拝するのであれ、心と肉体に落ち着きがなければなりません。そのとき集中力が発揮されます。今日の人々は、心と肉体に落ち着きを保つことができていません。

…（略）…デヴィ・ナヴァラトリの基本的な意味とは自然（プラクリティ）の崇拝です。デヴィとはブーデヴィ（母なる大地）をさします。生命を維持するのに必要なものはすべてこの地上で得ることができます。月へいった人々は、必要とする酸素、水、食物を地上から持って行かねばなりませんでした。どれも月では入手できないものです。

学生たちよ！　科学技術の進歩は二酸化炭素の煙で大気を汚染し、地上の生命をおびやかしています。すでにこの煙は、太陽の有害な光線にたいし保護膜の働きをしているオゾン層に、オゾンホールをつくってしまいました。もしもオゾン層が破壊されれば、太陽光線は破壊的な作用をもたらします。この危機を避けるには、車や工業廃棄物のひきおこす大気汚染をへらすことです。何の規制もなくただ工業を発展させるのはやめなければなりません。公共の福祉、全体の繁栄のためでなければなりません。

ナヴァラトリのお祭りは、自然を崇め、自然のもたらす資源を人類の最善の利益のためにどう活用するのが適切かを考える機会です。水、空気、エネルギー、ミネラルなどの資源は正しく用いられるべきものであって誤用、乱用すべきではありません。無駄なく効率よく活用することが不可欠です。大気の汚染は様々な有害な結果をもたらします。ナガラ・サンキルタンやバジャンを歌うことには、神聖な波動、神聖な想いで大気を満たすという意味がこめられています。

（サナタナ・サラティ　１９９２年　１１月号　２６７－２６９ｐ）

◇　◇　◇　◇

この世は３つのグナ（サトワ・ラジャス・タマス）の顕現です。神はデヴィとして崇拝され、デヴィとは女性性を表す言葉です。「女性」を意味する言葉はストリーです。この言葉には３つの子音サ、タ、ラがあります。サは人のサトワの側面の象徴です。サトワの資質は人の表す第一の資質です。愛の気持ちは母親から生じます。母の愛の本質は言葉でいいつくすことができません。母親は自らの血液を愛に変え、ミルクとして子どもに栄養を与えます。サの象徴する第一の資質とはサトワの資質といえます。

２つめの子音はタです。これはたんにタトワやタマスの象徴とはいえません。アニ・クマールは食べ寝るばかりの状態がタマスの特徴であると言いましたがそうではありません。ストリーという言葉にあるタの子音は、

内気さ、謙虚さ、自尊心という女性に特徴的な資質の象徴です。内気なのは女性に顕著な特徴であり、また名声や評判を重要視します。ここでいうタマスの資質とは、こういった女性に特徴的な神聖な資質をさします。タマスの一般的な見解はふさわしいものではありません。

子音ラによって象徴される３つめの資質はラジャスです。女性の犠牲の精神や気高さは、ラジャスの資質の反映です。必要とあらば自らの名誉を守るため命さえ犠牲にすることができます。試練や困難にあおうとものともせず、名誉、尊厳を守るためには何をも犠牲にするのです。タマスの資質がサトワの資質をおびやかそうとすると、女性は自らすすんで闘い、うち負かそうとします。

このように、デヴィとは悪の力を制しサトワを守るため、ラジャスの姿をとる神性エネルギーを象徴する言葉です。不正、不道徳、偽善が怪物のようにふくらみ死の踊りにふけったとき、自己中心や私利私欲が増大したとき、人が優しさや慈しみの心を失ったとき、アートマ原理がシャクティの姿をとってラジャスの資質を帯び、悪の要素を破壊します。これがダサラ祭にこめられた意味です。

女神が悪の要素を滅ぼすためすさまじくいきりたつと、恐ろしい姿になります。この恐るべき女神を鎮めるために、少女たちが赤いクムクム（神聖な赤い粉）で礼拝を捧げます。女神は御足に捧げられた血のように赤いクムクムを見て、邪悪なものが確かに滅ぼされたものと思い、優しい姿に戻ります。赤いクムクムでデヴィを崇拝するのには、女神を鎮めるという意味があります。ダサラ祭の１０日間で、邪悪な資質の悪魔（ラクシャサ）たちが滅ぼされます。ラクシャサに悪魔のような生きものという意味があるのではありません。人の内にある悪い資質が悪魔なのです。傲慢さが悪魔、悪い資質が悪魔です。ラーヴァナはラクシャサの王として描かれ、１０の頭をもつといわれますが、生まれたときから１０の頭だったのではありません。ラーヴァナとは誰で、１０の頭とは何のことでしょう。カーマ（欲望）、クローダ（怒り）、モハ（幻想）、ローバ（貪欲）、マダ（傲慢）、マトサリヤ（嫉妬）、マナス（心）、ブッディ（知性）、チッタ（意志）、アハムカーラ（エゴ）―――これら１０の資質が１０の頭です。ラーヴァナはこれら１０の資質をそなえた人物でした。人は誰もがその資質によって、ラーヴァナになるかラーマになるかを自ら決めることができます。ラーマは悪の資質の破壊者でした。悪の資質を滅ぼすときラジャスの資質をあらわにしました。しかしラジャスの資質はサトワの資質と結びついていました。ラーヴァナの１０の頭を切り落としたときでさえ、ラーマは愛を見せました。そうすることでのみ、ラーヴァナに救いを与えることができたのです。

神が罰を与えるとき、それは手荒にみえることでしょう。しかし表面的にはラジャスにみえても実のところサトワなのです。あられまじりの嵐は雨とあられを含みます。しかし雨もあられもそもそも水です。同様に神のふるまいがたとえラジャスであったとしても、そこにはサトワの資質があります。神がどうふるまうかは、時、場所、状況によります。バターは指で崩せても、鉄の塊を砕くにはカナヅチが必要です。神はサトワの人にはサトワでこたえ、ラジャスの人にはラジャスの武器をふるいます。

人々は神が恐ろしい姿と性質のものであると考え神を崇拝します。これは正しくありません。神にはたったひとつの性質しかありません。愛の体現ということです。こういわれてきました。「愛は神である。宇宙は愛に満ちている」世俗の目で世界を見てはいけません。愛の目で見なさい。

（サナタナ・サラティ　１９９１年　１１月号　３５１ｐ）

◇　◇　◇　◇

ラクシュミーには自然を保護する側面があります。ドゥルガー（カーリー）が悪の資質を滅ぼすとき、ラクシュミーは心を浄化します。そうしてサラスワティで象徴される言葉の清らかさが生じます。このようにドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティには心、言葉、行いから不純なものを取りのぞく役割があります。

自然（プラクリティ）は神の顕現です。人は自然を知覚し体験しても、自然の中に神を認めることができません。表面的な形として顕れた神を見ていながら、その神性を認識することができないとは、愚かさのしるしです。人は自然界を宇宙として見ています。これはヴィシュヌ神のとった宇宙の姿（ヴィラータ・スワルーパ）です。神に特定の姿や住みかがありますか？　いいえ、あらゆるところにおわします。神があなたであり、あなたが神です。それを認識できたとき、神を理解することができるでしょう。自分の目を見るにはこの世のものを何でも映す鏡が必要であるように、自らの内なる神を見たいなら、ブッディを活用しなければなりません。神をどこかに探そうとするのは愚かなことです。神は母親より近いものです。ハートに純粋さがあれば、知性を通じ内なる神を体験できます。この体験を得る手段が愛です。愛が神だからです。

（サナタナ・サラティ　１９９２年　１２月号　頁不明）

◇　◇　◇　◇

この宇宙には３つの姿があります。粗雑体、精妙体、原因体です。物質的な世界は粗雑体を示します。精妙体が心であり、さらに精妙なものがアートマです。

人の肉体は５つのさやからなりたち、その５つは３つのグループに分けられます。アンナマヤコシャ（食物のさや）が粗雑体で、プラーナマヤ（生気のさや）、マノマヤ（精神のさや）、ヴィジュナーナマヤ（知性のさや）の３つが精妙体のさやです。アナンダマヤコシャ（至福のさや）は原因体のさやです。この最後のさやでさえ究極的な至福ではありません。アナンダマヤコシャを超えたところにより高次の実在があるからです。それはマハー・カラナ、超原因体と呼ばれます。これがアートマ原理です。

人はみなこの３種の姿をもつことからトリプラスンダリと呼ばれます。誰にでもトリプラ（３つの街）があります。３つのプラとは肉体、マインド、ハートです。本質的に女性性であるプラクリティの要素の多くが肉体にあることから、肉体をスンダリ（美しき乙女）と呼びます。

ナヴァラトリのお祭りの間、トリプラスンダリが崇拝されます。残念ながら太古の昔より、人々はお祭りにこめられた意義を理解することなく、表面的に礼拝して祝ってきました。この宇宙全体が寺院です。神は宇宙に遍在します。自然（プラクリティ）はナヴァラトリにかかわる霊性の真理を教えています。霊性修行を通じてサイの愛を知りなさい。神はサーダナを通じてのみ認識されます。サーダナとは、特定の場所で特定の御姿の神を崇拝することではありません。どこにいようと何をするにも神を思うということです。どうしたらそれができるのかと思うことでしょう。答えは、行いのひとつひとつを神に捧げることです。

ナヴァラトリの間、アンガラパナ・プージャと呼ばれる礼拝の様式があります。この儀式では、肉体のすべてを帰依（サラガナティ）の心で神に捧げます。帰依とはあますところなくすべてを神に捧げ、自分と神の間にへだたりがあるという意識を捨てることです。このへだたりが感じられる間は真の帰依はありえません。万物に宿る神が同じひとつの神である（*エーカム　ヴァシ　サルヴァブータ・アンタ・アートマ）と確信しなければなりません。（*Ekam Vasi Sarvabhuta-anta-atma）

アンガラパナ・プージャを行う中で、そこにはある種の自己欺瞞があります。帰依者が「*ネトラム　サマルピヤーミ（私の目を神に捧げます）」と唱えながら花を捧げるとき、その帰依者は自分をあざむいています。「花を捧げます」と唱えたほうが事実にそくしているでしょう。「ネトラム　サマルピヤーミ」のマントラは、神を見るためだけに私の目を用います、と言おうとしています。このマントラの真の意味とは、何を見ても何を行ってもそこに神を見いだすということです。ですからアンガラパナ・プージャは、肉体のすべてを神の奉仕のために捧げると宣言してこそ意味があります。何の仕事をするのであれ、神に捧げるものとして行わなければならないということです。今日帰依者の間には利己心が蔓延し、神を求めて神を愛するのではなく、利己的な欲望を満たすために神を愛します。利己心がはびこりつづけているかぎり、神を理解することはできません。（*Netram Samarpayami）

ナヴァラトリのお祭りは、自分の資質が人か、動物か、悪魔かを判断する機会であり、動物的な資質を人間性に、人間性を神性に変える努力をしなければなりません。英知は外側から得られるものではありません。内なるサーダナにより得られるものです。

（サナタナ・サラティ　１９９２年　１１月号　２７０－２７１ｐ）

◇　◇　◇　◇

負債とは、他の人から何かを受けとることで生じます。人の肉体にも負債が課せられていることが容易に分かるでしょう。神性エネルギーが肉体を養い保っているからです。この神性エネルギーは全身にいきわたるもので、ラサ（神の真髄）と呼ばれます。この貴重な肉体を与えてくれただけでなく維持している神に、私たちは負債を負っています。この負債を神に返済することでのみ、肉体という贈りものを享受することができます。どのようにしたらよいのでしょうか。正しい行いをし、社会の中で働きながらあらゆる行いを神に捧げることで、同じ神に満たされた他の肉体に奉仕し返済することができます。この負債の返済が早ければ早いほど、神を認識する日は近づきます。

また、人にはリシたちへの負債があります。無私の探求、体験により、聖者たちは人々がよりよく生き、神との合一に到達するための道を見いだしてきました。よりよい価値ある暮らしを営み、覚醒への努力が成功するよう、その助けとなる正しい行いを様々に定めてきました。シャストラは神を敬い慕うための儀式や礼拝の

様式にもふれています。聖者たちはどのようにしたら人間性から神性にいたることができるのかを教えています。それらのきまりは他の名称で他のものにも記されています。しかし何と呼ばれようと、人類存続のためには欠かせないものです。

このきまりの数々から外れると、人々は様々な困難にさらされます。遅かれ早かれ、これらのきまりを破ったことへの代償を支払わなければなりません。正しく神聖な生き方についての貴重な手引きをいにしえの聖者たちが授けてきたのですから、これらの決まりに敬意をはらい、定められたことを守ることで負債を返さねばなりません。

今日、シャストラに敬意をはらうかわりに、人々はその名誉を汚し、決まりを破り、無謀な罪を犯して生きています。聖者たちのしいた道に従うことで、模範的な生き方を送り、人の可能性の頂点にまで到達することができるのです。

（サティア・サイ・スピークス１６　１３３ｐ）

２．ドゥルガー―――クリヤ・シャクティ（行いの力）、プラクリティ（自然の力）

ドゥルガーは驚異的な自然の力（プラクリティ・シャクティ）の象徴です。この自然のエネルギーに拮抗するのがパラシャクティ（魂の力）です。魂の力が優勢になると自然の力が統制下におかれ、魂の力が弱まると自然の力が優勢になります。これは火と煙によって説明できます。煙が多くなると火力が抑えられ、炎が燃えさかるときには煙が姿を消しています。魂の力を高めて自然の力を制限するには、ヴァイラーギヤ（無執着）を養わなければなりません。自然の力が統制下におかれる度合いに応じて、魂の力が大きくなります。

（サナタナ・サラティ　１９９２年　１２月号　３０４ｐ）

◇　◇　◇　◇

ドゥルガーは母なる自然（プラクリティ・マータ）の象徴です。自然の影響から生じる悪の資質をうち負かすには、その自然の力を呼びおこさねばなりません。これがドゥルガー崇拝の意義です。自然とは罰を与えるだけでなく保護するものでもあるのです。

（サナタナ・サラティ　１９９２年　１２月号　３１０ｐ）

◇　◇　◇　◇

私たちの肉体の内にあるエネルギーがドゥルガーの姿であることを確信しなさい。エネルギーを浪費してはいけません。私たちは悪いものを見、悪いことを話すことでエネルギーを無駄にしています。非難されて当然です。優しく落ちついた言葉、行いに変えていかねばなりません。今日のようなお祭りは、エネルギーをつまらぬことに浪費しないことの大切さを理解し、決意するために祝われてきました。それがお祝いのもっとも重要な意味です。こう祈りなさい「母なる神よ、あなたは私の内なるエネルギーです。どうか正しいことのためだけに用いることのできるよう、エネルギーを私に流してください」

（サンキルターナム　１５ｐ）

◇　◇　◇　◇

イッチャ、クリヤ、ジュナーナという至上のエネルギーは、神性原理、ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティに体現されています。クリヤ・シャクティはあらゆる富と繁栄の源でありながら、いたるところにその姿を顕します。私たちの吸う息、吐く息が富であり、まなざしが富、言葉が富―――みな富の様々な姿です。そのように認識されたなら、神の遍在を理解することができるでしょう。

（サンキルターナム　１３ｐ）

３．ラクシュミー―――イッチャ・シャクティ

イッチャ・シャクティ（意志の力）は想いから生じます。このイッチャ・シャクティは知性、識別能力、その他潜在する力の源です。イッチャ・シャクティ（意志の力）を育むには、デヴィ崇拝をすることです。それにはティヤガ（諦観、無執着）を養う必要があります。たとえばたくさんの種類の飲み物を飲みたいという欲望が起こったとき、まずはじめにそのうちのいくつかを断念することで欲望をコントロールしていくことができます。そうするうちに意志の力（イッチャ・シャクティ）が強められ、後にはその他の欲望も容易に捨てさることができるようになります。ヴェーダンタ哲学の言葉では、ヴァイラーギヤ（あらゆる執着を断ち切ること）といいます。ヴァイラーギヤは家庭を捨て森に隠遁することではありません。信仰心を育み、俗世意識をへらすことです。そうしたバランスで成長していったとき、自然の力（プラクリティ・シャクティ）をコントロールできるようになります。

（サナタナ・サラティ　出典箇所不明）

◇　◇　◇　◇

あなた方が食べる食物はまさにラクシュミーの御姿です。ほんの少しであろうと無駄にしてはいけません。必要な分だけを食べなさい。水さえも無駄にしてはいけません。五元素はみなラクシュミーの御姿なのです。

（サンキルターナム　１６ｐ）

４．サラスワティ―――ジュナーナ・シャクティ（純粋なる知性、言葉の力）

サラスワティは女神であり、創造主ブラフマーの伴侶です。あなた方はみな崇拝する女神の帰依者であり、女神は英知と救済を授けます。女神の授けるこの至上の恩恵に忠実でありなさい。即物的な五感の飢えにエサを与えて満足してはいけません。安っぽい名声を求めて理想をおとしめたり、美意識を低俗にしてはいけません。ローキカ・スリンガラム（俗世の快楽）のかわりにアローキカ・アートマアーナンダム（神性セルフの至福）を与えなさい。愛を拡大し、動機を純粋にし、慈しみの気持ちを高め、差異性に寛容になり、人それぞれの努力に敬意を払うよう努めなさい。

（サティア・サイ・スピークス４　３７ｐ）

◇　◇　◇　◇

英知の力はサラスワティです。サブダブラフマイー（音の化身）、チャラチャラマイー（動・不動の化身）、ジョーティールマイー（光の化身）、ヴァクマイー（言葉の化身）、ニッティヤーナンダマイー（永遠なる至福の化身）、パラトパラマイー（至福の化身）、シュリーマイー（富の化身）―――これら８つの愛がみなサラスワティから生じ、あらゆる種類のヴィディヤを説きます。サラスワティは白鳥に乗りますが、これはまさに「ソーハム」のマントラに象徴される呼吸のことです。サラスワティはヴァク・スワルーピニ、話す能力それ自体がサラスワティです。ヴェーダ・スワルーピニともいえましょう。サラスワティはまさにあなたの内に宿ります。

（サンキルターナム　１３－１４ｐ）

◇　◇　◇　◇

アートマ＝良心はあなたの力の源です。呼吸のたびに発せられるソーハムがこのことを示しています。ソーハムはハムサ・ガヤトリーとしても知られます。ハムサ（白鳥）は水とミルクの混じったものからミルクだけをより分けて飲むことができると信じられます。ハムサ・ガヤトリーは肉体意識を魂（アートマ）から切りはなすものとして唱えられます。ガヤトリーには２つの別名があり、サヴィトリー、サラスワティとも呼ばれます。サヴィトリーは生命の主であり、サラスワティは言葉、ヴァクを治める神格です。ガヤトリー・マントラのブール・ブワ・スワハは肉体（ブール）、生命（ブワハ）、プラジュナ（意識＝スワハ）をさします。人の外にあるどこか別の世界のことではありません。この３つは人の内にあります。だからこそ人は非凡な存在なのです。大宇宙の神性意識の具現（チャイタニヤ・スワルーパ）なのです。

（サナタナ・サラティ　１９９３年　６月号　１５４ｐ）

◇　◇　◇　◇

神格は様々に誤解されています。たとえば、サラスワティは白鳥に乗った女神として描かれます。サワスワティは言葉の女神です。言葉は呼吸の吐く息、吸う息にもとづきます。呼吸にともないソーハムという音が発せられ、それが規則的にくりかえされることで、その音がハムサ、白鳥を意味する音になります。呼吸は言葉の女神の乗る乗りものなのです。

（サナタナ・サラティ　１９９５年　9月号　２５９ｐ）

◇　◇　◇　◇

サラスワティは文芸の象徴であるだけでなく、完全なる至福、アーナンダを授ける恵みでもあります。人の内にある不純物を根こそぎにし、人を神聖で敬虔にします。サラスワティはアートマ・タトワを確立し、また人と神とをつなぐ流れです。その流れは決して外に流れ出るものではなく、内に流れるものであることを心にとめておきなさい。

（サマー・シャワー・イン・ブリンダヴァン　１９７２年　１８１ｐ）

◇　◇　◇　◇

サラスワティは三大神の第一の神、あらゆる想像力の源であり支え主であるブラフマーのシャクティです。ガヤトリー―――探求者の知性を光で照らすよう光の源に祈りを捧げるヴェーダのマントラ―――これもシャクティの一面です。

ガヤトリー・マントラ（知性を照らすヴェーダの祈り）は、人の心の内からわきおこる神の呼び声、愛と光の体現者になるようにとの不変にして永遠不滅の神の呼び声です。それはどの国、どの時代であれ、まさに教育の根幹です。しかし今や人々はサラスワティ、ガヤトリーを忘れ、教育機関の祭壇には富の女神ラクシュミーをすえています。寛大な環境、寛大な履修科目、寛大な試験、怠惰な生徒への寛大な処遇が強調され、ときには悪意にたいしてさえ寛大さが要求されるのです。

（サティア・サイ・スピークス１３　７９ｐ）

◇　◇　◇　◇

ガヤトリーは５つの面からなりたちます。*１つめが「オーム」、２つめが「ブールブワッスワハ」、３つめが「タットサヴィトゥール　ワレニヤム」、４つめが「バルゴー　ディーヴァッシャ　ディーマヒー」ガヤトリーのこの５つの面は５つのプラーナ（生命エネルギー）を示します。ガヤトリーは人の内にある５つのプラーナの守り主なのです。「**ガヤトリー　トラヤテ　イティ　ガヤトリー＝唱える人々を守るためガヤトリーと呼ばれる」ガヤトリーが生命エネルギーの守り主としてふるまうとき、その姿はサヴィトリーとして知られます。サヴィトリーは、プラーナの神話の中では夫サティヤヴァンの命をとりもどした献身的な妻として知られます。サヴィトリーは５つのプラーナを治める神格であり、真理に根ざした生き方をする人々を守ります。これがここに秘められた意義です。（*Om Bhurbhuvassuvaha Tatsavithur Varenyam Bhargo Dhevasya Dheemahi）（**Gayatri thrayathe ithi Gayatri）

（サティア・サイ・スピークス１６　３６－３７ｐ）

◇　◇　◇　◇

ヴィディヤ（知性）は人々が神にむかい、自然もまた神であることを見いだすようさとすもの、自らに内在する意識を目覚めさせ、あらゆるものの背後にあるアートマ（セルフ）に気づかせるものでなければなりません。ヴィディヤとは人に知性を養うよう訴えかけるものです。この知性に価値があるのはどんなときでしょう。人格がないのであれば知性など火に投じてしまうのが一番です。今日、教養ある人々は教養のない人よりもさらに邪悪、貪欲、狡猾です。知性が他人につけこみ排斥するようけしかけるのです。この種の知識は世界を汚し毒しています。世界中いたるところで平安と繁栄をだいなしにしています。言葉、言葉、そしてまた言葉！

言葉は過剰になるばかりです！　何も実践されません。誰も動こうとしないのです。
今日学生たちのいる環境は混乱にゆれています。混乱どころかまったく狂気の沙汰です。白い制服を着ていても心は依然として暗闇です。

ハートは邪悪な想いに満ち
耳は醜聞を追い求め
目は見ざるべきを見て喜ぶ
マインドは不正をたくらみ
理性は偽善の計画をたてる
ヴィディヤが人の心の内を知ったなら
一瞬たりともそこにとどまろうとはしないだろう

カエルは蓮の近くで跳びはねても、その香りをかぐことも蜜を味わうこともありません。しかしハチは遠くからやってきてその両方を享受します。神に到達できるかどうかは、私たちがこれまでどのように心の型をつくってきたかによります。しかし人間は、正しい行いを誠実に実践しつづけることで、心の条件づけを修正することができるのです。善良であると周囲も善良さに満ちてきます。バラの花を手に持てば、周囲の人々にもその香りを届けることができるのです。

（サティア・サイ・スピークス１５　１９８－１９９ｐ）

◇　◇　◇　◇

ハムサ（神話上の白鳥）は、水とミルクの混ざったものからミルクだけをより分けて飲む能力があります。パラマハムサ（覚醒者、真理を得た者）も、幻想と真理をより分け、至福を体験し、真理のみと通じあうことができるのです。

（サティア・サイ・スピークス７　１８０ｐ）

◇　◇　◇　◇

ジュナーニ（覚醒者）とは、あらゆる人に宿るアートマを自らのアートマとみなします。一体性のみを実感しているため、人々の間に差異を認めることがありません。肌の色、カースト、教条などの物理的な違いは肉体に付随するものにすぎません。肉体という外側のものにつけられたしるしにすぎません。アートマとはニシュカーラ、いわば境目のないものです。ニルマーラ＝汚れのないもの、欲望、怒り、貪欲、執着、傲慢、羨望に影響されないものであり、ニシュクリヤ＝活動性のないものです。それらの制約を受けるもの、もしくは受けているような印象を与えているのはプラクリティ（自然）にすぎず、プルシャは活動性のない制約されない永遠の観照者です。
何をもって「これが真理である」といえるのでしょうか。過去・現在・未来にわたり存在しつづけるもの、はじまりも終わりもないもの、動きも変化もないもの、不変の姿をもつもの、体現されうる資質を束ねたもの――これらのみを真理と呼ぶことができます。肉体、意識、心、生命、エネルギー、これらについて考えてみましょう。これらには動きと変化があり、はじまりと終わりがあり、ジャダ＝不活性のものです。タマス・ラジャス・サトワの３つのグナをもち、根本的な実在性というものがなく、現実世界という幻想をもたらします。そこには相対的な価値しかなく、絶対的な価値はありません。借りものの光で光っているだけです。
絶対真理は時間と空間を超越し、ア・パリチチナ、つまり目に見えないものです。はじまりがなく、つねに、永久に存在します。土台にして根本であり、自明の原理です。それを知り体験すること、それがジュナーナムです。こういうものだと定義することも、何らかの特徴で説明することもできません。知性も心も超えたものを、たんなる言葉でどう説明することができましょう。
真理はアドリシャとも呼ばれます。変化にさらされ能力が大幅に制限された「見るための装置＝目」では見えないもののことです。ブラーフマンはどんな元素、物質を用いようと特定することができません。ブラーフマンによって見ることを可能にされている目に、そのブラーフマン自体を知覚することなどできるでしょうか。心は時間、空間、因果に制約されます。それらを超え、影響されぬパラマートマを、どうしてそれらで定義す

ることができるでしょう。

この根本的真理というものを、つねに心の視野にすえておきなさい。欲望を増加させてはいけません。時間を無駄にしてはいけません。たとえ一分たりとも。何か快楽を与えるものをひとつ求めれば、それよりさらに快楽を与えるものを望む気持ちが起こります。欲望それ自体の根を断ち、自らの師になりなさい。欲望を捨てさることで、すみやかにジュナーナのきわみに到達できます。

ジュナーニ、解き放たれた者とは喜び悲しみに影響されません。心（マインド）をとりはらった者にとって、そこにどんなものが反応をひきおこせるというのでしょう。「感じ」させているのは心（マインド）です。もしも意識をなくす薬を飲んだら、何の苦しみも、喜びさえも感じません。肉体が心から切りはなされているからです。それと同じで、英知の夜明けを迎えれば、心（マインド）を切りはなし、あらゆるものの接触から遠ざけておくことができます。

心の乱れは特定の訓練により鎮めることができます。その結果、心の牽引力から自由になり、アートマンの至福を味わうことができるようになります。心は人を外界へとひきつけ、外界の物質的な喜びのみを供給します。しかし賢明なる者は、それらの歓びが過ぎさるものであることを知っています。アートマだけで幸せを求める欲望すべてを満たすに十分であり、完全にして永遠不変なのです。外界に何かを求める必要はなくなります。

ジュナーニはその高潔な決意、努力、追求を通じ、ある種特別な能力を身につけます。望む者すべてを手に入れることができるのです。ジュナーニの偉大さとは、実に言葉を超え想像力さえおよばぬものです。神の栄華、壮麗さそのものといえます。つねにそうでありつづけていたブラーフマンになるからです。そこから「*ブラーフマンを知る者は自らブラーフマンになり、ブラーフマンの資質を身につける」、そう明言されるのです。この世が虚構であり、ブラーフマンのみが真理であることを明らかにしなさい。そのときあらゆる衝動が滅ぼされ、無知が消滅します。ジュナーナという宝石は心（マインド）に盗まれました。心（マインド）をとらえればとりもどすことができます。その宝石はあなたにブラーフマンの地位と威厳を与え、あなたはただちにその気配をただよわせることでしょう。（*Brahmavid Brahmaiva Bhavathi, Brahmavid Apnothi Param）

このアートマ・ジュナーナを勝ちえた偉大な魂たちは崇拝にあたいします。聖なる人々です。どんなに難しく、どんなにタパスを求められようと、万人の権利であるブラーフマンに到達しました。ブラーフマン、それが彼らの求めた王国であり、彼らの希求した栄華です。ヴェーダ、ウパニシャッド、シャストラが説明する偉大なる神秘です。この神秘をひもとくこと、そこに人生の価値があります。それが解脱にいたる鍵です。

（ジュナーナ・ヴァヒーニ　２４－２５ｐ）

まとめ

ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティとは、人の粗雑体、精妙体、原因体に内在し、全宇宙にあまねくいきわたる神の威力であり、根源エネルギー（アディ・シャクティ）に由来します。人のあらゆる側面がこの神性エネルギーでなりたつことから、人も神であるといえます。この真理を理解するために知性を用い、行いを営むことが重要です。アートマの英知を授けるエネルギー、サラスワティは、人をジュナーニ＝解き放たれた者にします。

１９９６年１０月２１日のヴィディヤ・ダサミの御講話で、サイ・ババはこう言っています。「ドゥルガーは、あなたのハートに力、エネルギーとして宿り、サラスワティはあなたの言葉に宿るエネルギー、ラクシュミーはあなたの両手を崇高な行いに用いたときにあらわにされるエネルギーです」